



日常の死角に夢を見る。

本プロジェクトでは、日常の死角と呼べる【都市の余剰空間】に

子どもの頃に作った秘密基地のような

自分の居場所だけでなく自分だけのものではなくて、
1人なんだけど1人じゃない

そんな新たな身の置き所【アジール】を都市に散りばめる。

アジールマップを介し、新たなカタチのコミュニティハブを模索する。

0-1. トイレの中のわたし。

ここは窓ひとつない高層ビルの9階、製図室。
淀みきった空気と疲れ切った人々で溢れかえる。

私をバカだと言う指導教員がうざい。
我慢ばかりしてくる先輩がうざい。
彼氏のろけ話はかりしてくる友達がうざい。

なんだか息苦しくなっている自分がいた。
「1人きりになりたい。」
気がつけばトイレで1人時間を潰かしていた。

0. 私の、違和感。

1-1. 放置と不法投棄が創りだす私のオアシス。

厳密に言えば、ここは私の持つ土地ではない。
マンション内の空き地だ。
不法投棄のゴミたちが見えない空間を創り出す。

空き地にゴミを捨てる悪人が作る
私の秘密基地。

1-2. 消えたオアシス。

2023.10.24
そして私のオアシスはある日突然消えた。

私はわたしのためのオアシスを
秘密基地を
アジールを、
私自身の通学路に散りばめる。

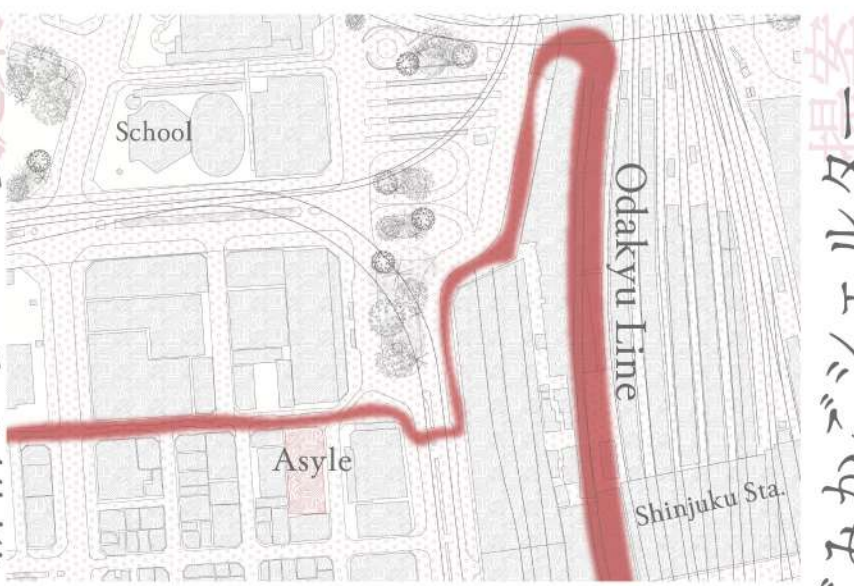
1. 裏庭オアシスの出現と消失。

ある日私は『スベクタクルの社会』を抱えて
家を飛び出した。
そして通学路である小田急を途中下車し、
街を漂流した。

ぼんやりと漂いながら
いつもの街を読み直し
心の中に新しい地図を描いた。
そして日常の死角に夢を発見した。

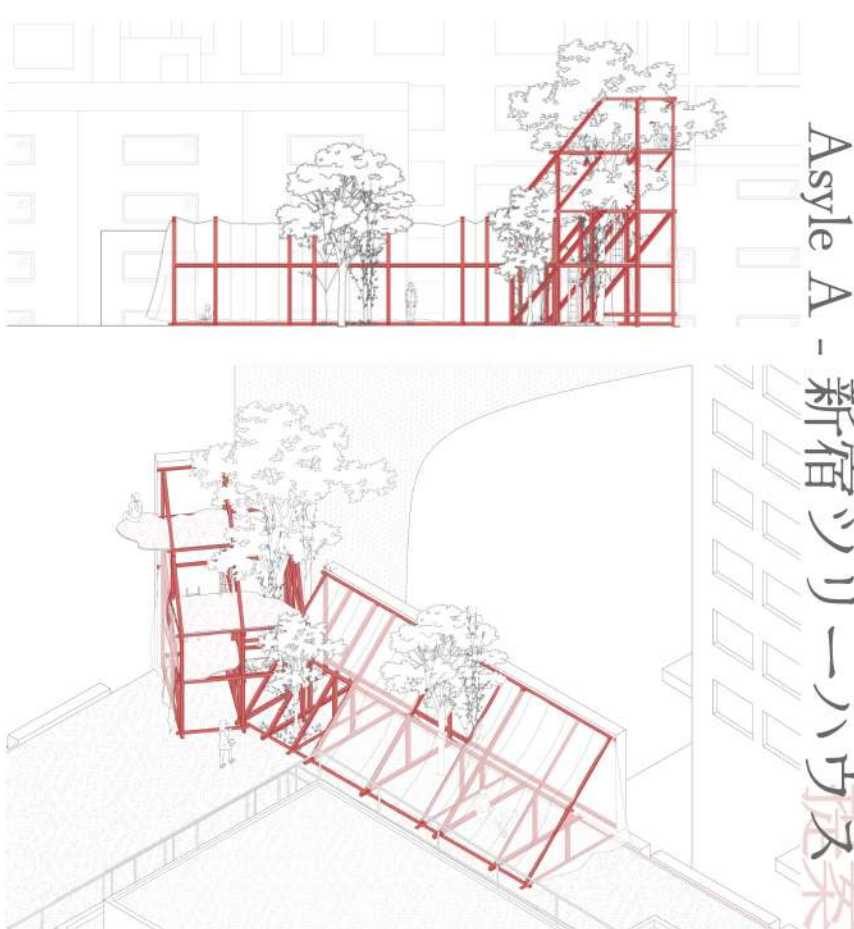
2. 秘密基地をちりばめる。

2. 秘密基地をちりばめる。



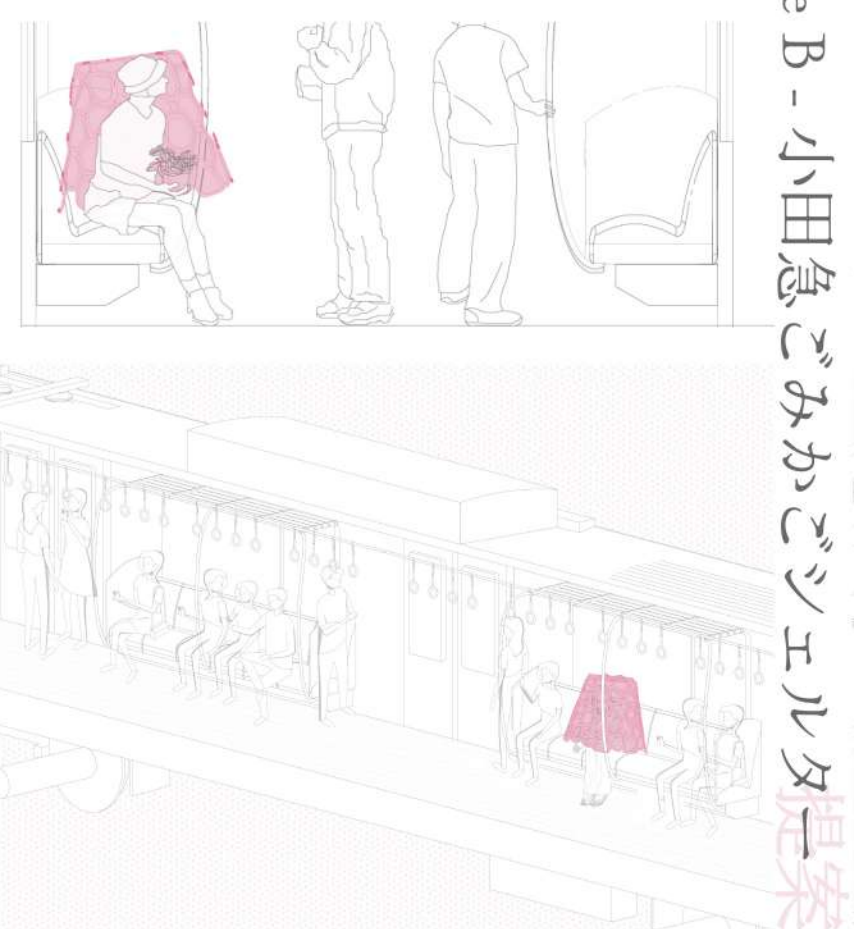
昔さんは、私がどのようにこの場所にアクセスしたのか
知りたいに違いない。

ヨドバシカメラ西館のエレベーターに乗り、最上階の8階へ行く。
家電売り場の冷蔵庫コーナーへ行き、最も大きな冷蔵庫の扉を開ける。
そこに屋上へ通ずる階段があるのだ。



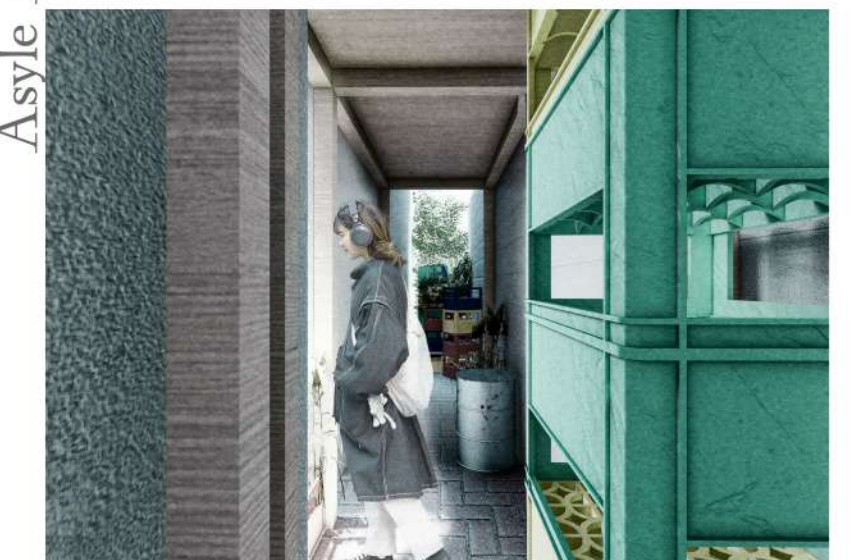
いびきをかきながらもたれかかってくるおじさんが邪魔だ。
コンパクトをあけて、車内で化粧をする女子高生が邪魔だ。
ムグ毛を脱毛をしると叫び続ける車内広告が邪魔だ。
音漏れに気がつかないまま大音量でゲームをしている大学生が邪魔だ。

全てを邪魔だと思う自分が邪魔なので、
自分をゴミ箱に捨ててみることにした。



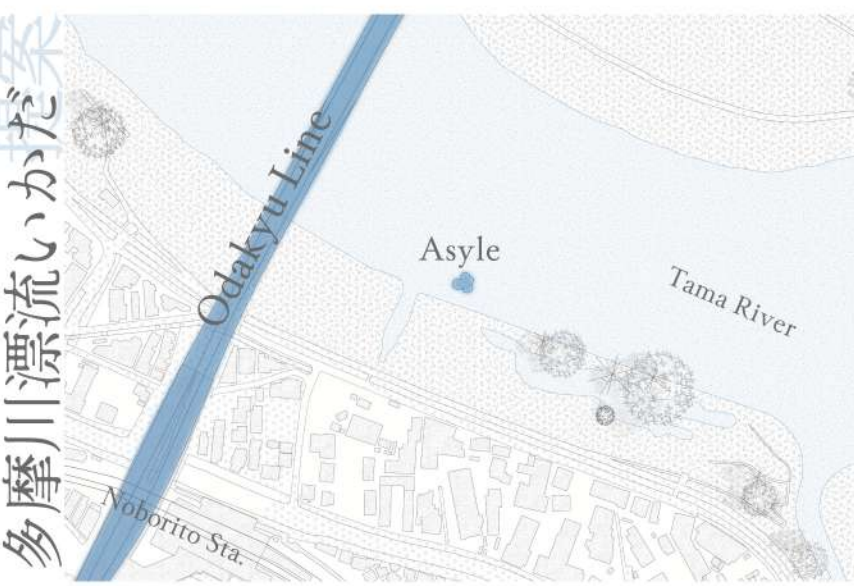
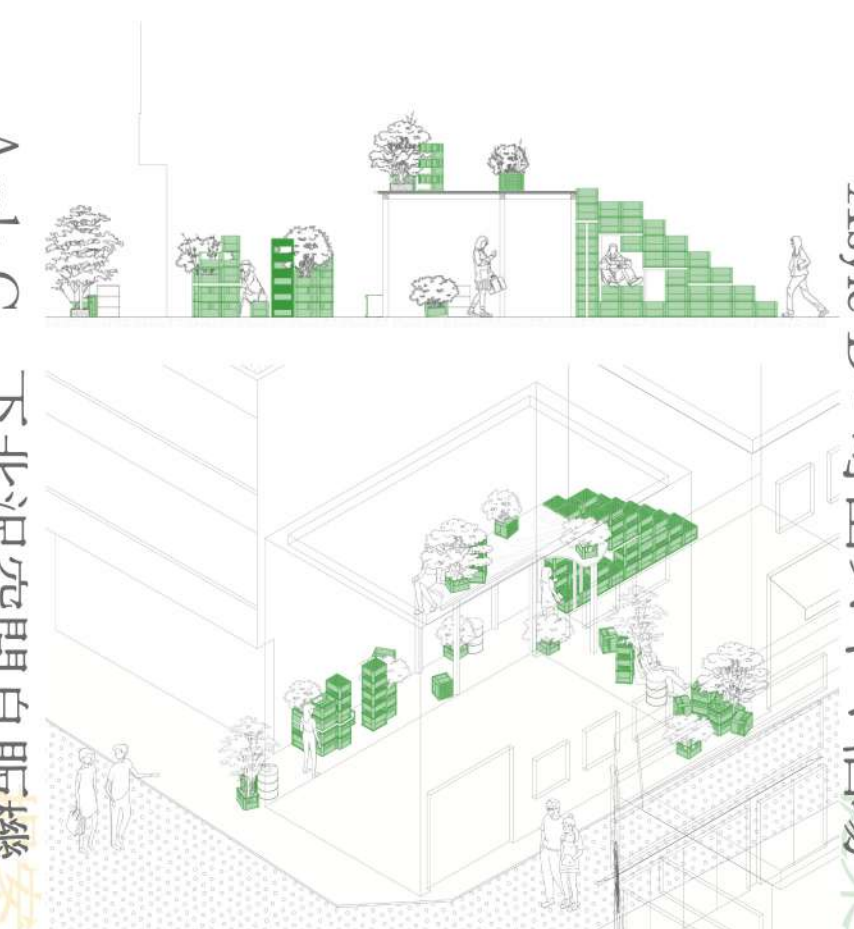
自販機に100円を入れると扉が開いて私はその中に滑り込んだ。
どこか懐かしい感覚を抱いていた。

それはきっと子どもの頃親に何度も叱られながら隠れた押し入れの中。
自販機の中から売りの視点で街を眺めると妙に心が安らいだ。



1人飲み歩いていたら酔っ払いのサラリーマンに絡まれた。
めんどくさくてビルとビルの間のスキマに逃げ込んだ。
そこに積まれていたビールケースで壁や椅子をこしらえて
セルフサービスのバーを作った。

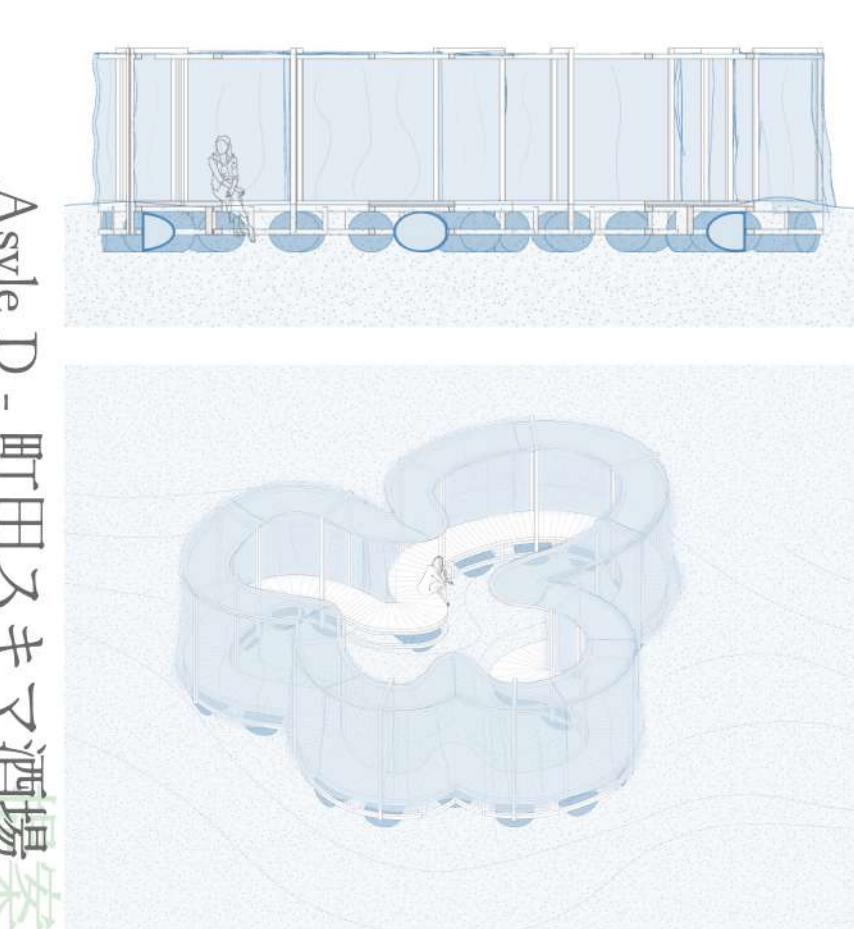
ケースの中のビールを飲みつくしたらいつしか眠くなりここで朝を迎えた。
気が付くと都市の死角に朝の光が差し込んでいた。



ある日、私は日常から亡命するために一人でいかだに乗り込んだ。
アメリカにたどり着くか北朝鮮にたどり着くか流れに身を任せてみよう。

4つ葉のクローバーのように切り取られた青い空をぼーっと眺めていた。
食料を獲得するために釣り糸をたためたものの夕方まで成果はなかった。

結局私は岸と繋ぐ綱を外すことは無く、とぼとぼ夕闇の街に戻った。



3. 新たな日常に夢を見る。

全ての人はそれぞれの日常 (situation) を生きている。
みなそれぞれ頭の中に自分自身の心理地理学的地図があって、
その中に自分だけのアジールを思い描くことができるだろう。

日常の死角に夢を見てそれが溢れ出した時、
きっと新たな日常が幕を開ける。

わたしとあなたの夢で世界が溢れれば
きっと毎日は子どもの頃のようにきらきらと輝き出すはずだ。

私のアジールマップをここに共有する。
あなたもどこか逃げ場が欲しい時、なんだか一人きりになりたいとき
わたしのアジールを使っても構わない。
あなたもアジールを見つけた時、都市の片隅にアジールを作ったとき
あなたのアジールマップを作り、
わたしたちにもぜひ教えて欲しい。

4. ごみかごシェルター都市実験 in 新宿

代表者：中川 優奈
連絡先：dm24059@g.kogakuin.jp